

キャラクター名  プレイヤー名

シンドローム	サラマンダー		ワークス	小学生	カヴァー	小学生
	サラマンダー					
オプショナル	年齢			10	性別	女の子
覚醒	死	衝動	妄想	初期侵食率	32%	
出自	義理の両親	経験	大成功	邂逅	恩人	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	4	0	0			4	行動値	4
感覚	0	1	0			1	(非装備時)	4
精神	2	0	0			2	戦闘移動	9
社会	2	0	0			2	全力移動	18

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	4		交渉		
回避			知覚	2		意志	1		調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
りんとうるむ	RC	5r+4	0	27		C値8 範囲(選択) 装甲無視 侵蝕値10
ふあふにーる	RC	5r+4	0	30		C値8 範囲(選択) 装甲無視 HP5口ス 侵蝕値14
とりしゅーら	RC	6r+4	0	57*2		C値7 範囲(選択) 装甲無視 HP13口ス 侵蝕値36

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲: 0 合計回避: 0

所持品	
コネ: 噂好きの友人	
アクセサリ	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
Dロイス: 申し子P		N		
ともだち	P 幸福感	N 不安		
ゆーじーぬのおねーちゃん	P 慕情	N 劣等感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエクストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
C:サラマンダー	2	2	メジャー					シンドローム
効果:	C値-LV(下限値7)							
苛烈なる火	1	3	セットアップ	至近	自身	自動		
効果:	攻撃力+[LV*3] HP5口ス							
災厄の炎	5	4	メジャー	至近	範囲(選択)	対決		
効果:	攻撃力+[LV*3]の射撃攻撃							
プラズマカノン	5	4	メジャー	視界	単体	対決	100↑	
効果:	攻撃力+[LV*5]の射撃攻撃							
結合粉碎	3	4	メジャー			対決		シンドローム
効果:	ダイス+LV 装甲無視							
セレリティ	1	5	メジャー	至近	自身	自動		
効果:	メジャーアクション2回 HP10-LV口ス							
温度調節	★		メジャー	至近	自身	自動		
効果:	熱の管理							
炎の理	★		メジャー	至近	効果参照	自動		
効果:	炎を作り出す							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

とある学校に通う小学生。  
明るく活発な性格で外で遊ぶのが好き。  
オーヴァードの力を隠しもせず全力でやるため、よく友達から文句を言われる。  
現在UGNエージェントの女性と一緒に生活している。  
少し前までは無口でいつも死んだような眼をしていた。  
物心ついて間もないころに旅行先で事故に遭ったのが原因だ。

自動車であんまり進んでいた時のこと、雨が降り見通しの悪い夜だった  
帰れなくなる前に帰ろうと少し無理をしたのが仇となった  
雨でスリップし、崖から転落。車は爆発炎上し、両親と一緒に焼け死んだ  
転落のショックで気絶して、苦しまずに死ねたのが不幸中の幸いか...そのままそこで短い人生が終わるはずだった  
だが現実はずっと  
次に目を覚ました時、そこは雨の降る事故現場  
淀んだ黒い空からは冷たい雨が降り注ぎ、辺りには車の破片が散らばっていた  
体中が痛い、指先を動かすことも出来ないくらいに  
痛くて泣きたいのに涙なんて出てこなかった  
しばらくして感覚が戻ってくると、鼻を衝くのは焼けた肉の臭い  
それが何か理解した時何とも言えない気持ちが込み上げてきて声として吐き出された  
血の味がする、喉が裂けるほど叫んだ、声が掠れてもずっと...ずっと...  
その声を聞きつけてだろうか、人が一人走ってくるのが見えた  
現場の惨状を見て一瞬悲しそうな顔をした後まだ息のあった百江を抱き上げ  
「大丈夫！」とか「しっかり！」と声をかけていた